

聖書:エペソ人への2章11~16節

説教:二つを一つのからだとして

はじめに

私たちはユダヤ人ではありません。けれども、イスラエル民族と同じ救いの約束をいただいていると信じています。それにはちゃんと根拠があります。使徒の働きにでてくるのですが、ペテロの目の前でローマの百人隊長コルネリウスとその一族の上に御霊が注がれて救われていきました。そこで初めて、神はイスラエル人だけでなく異邦人をも救おうとされているとわかった。それで異邦人である私たちも安心していま教会に来ることができるようです。ところが初代教会はいろいろな困難にぶつかります。律法を大切にす文化で育ってきたユダヤ人とそうではない異邦人との間で、律法の解釈を巡って人間関係の争いが起きてしまいます。エペソもそのような教会の一つでした。同じ信仰をもっていたとしてもこうなのですから、まして信仰がない場合はもっと大変です。夫婦はもちろん親子、親戚同士、隣近所、学校や職場。人間関係のことでみな悩んでいる。いったいどこに望みがあるのでしょうか。ともに見てまいります。

1 かつて

1) キリストから遠く離れていた

今日の箇所を大きく三つに分けて見ていきます。一つ目は、かつて私たちはどんな状態だったのか。二つ目は、そんな私たちにキリストは何をしてくださったのか。三つ目は、その結果私たちはいまどんなところに置かれているのか。

そこでまず一つ目かつて私たちはどんな状態だったのかから。最も特徴的なのは12節の「キリストから遠く離れていた」というところでしょう。先日あるテレビ番組を見ていたら、北海道神宮に来た若い人に「ここにだれが祀られているか知っていますか」とインタビューしていました。そうしたら「だれだろう?」と言って答えられない。ではどうして神社に来たのかと尋ねると、「神聖なパワーが感じられるから」というのです。日本人の多くはおそらくこんな感じで、神を意識することはほとんど希で、キリストから遠く離れています。私もかつて同じでした。

2) 望みがなく、神がなかった

そうしたらどうなるか。12節の後半にこうある。「この世にあつて望みもなく、神もない者

たちでした。」でも世間の人たちは反論するでしょう。「私たちにもちゃんと望みはあります。」そう言いたくなる気持ちはわかる。では何も悩みはないのか。そんなことはない。いじめや仲間はずれにされて苦しみます。あるいは反対に、自分が他の人を裏切ってしまったとか、深く傷つけてしまって自分ではどうしようもできない。そこで悩んでいる。そしてもっとも深刻な悩みはいのちのことに關してでしょう。あなたのいのちは長くはないと知らされたり、あるいは家族が死にかけているというとき、どこに光を見いだしたらよいか。多くの人たちは嘆き悲しむしかない。それが望みがないという状態です。

2 キリスト

1) 近い者となった

ではどうするか。13節。「しかし、かつては遠く離れていたあなたがたも、今ではキリスト・イエスにあつて、キリストの血によって近い者となりました。」キリストを知らず、キリストから遠く離れて望みも神もない状態の私たちでしたが、キリストに対して近くされました。近いといってもいろいろある。後ろ姿がちょっと見えるくらいの近さか。そうではない。前回見たとおりです。「神はまた、キリスト・イエスに会つて、私たちをともによみがえらせ、ともに天上に座らせてくださいました。」よみがえることにおいても、天の御国に入ることにおいても、キリストがともにいてくださる。それくらいの近さにキリストがおられる。

2) 血と肉によって

ではどのようにしてキリストは、遠くに離れていた私たちを近くに引き寄せてくださったのか。13節には「キリストの血によって近い者となりました」とあり、14節には「キリストは私たち二つのものを一つにし、ご自分の肉において隔ての壁である敵意を打ち壊した」とあります。十字架において裂かれたからだの肉、そこから流されたキリストの血によって、私たちはキリストのもとに引き寄せられてきました。それはとりもなおさず、キリストが私たちのためにいのちを投げ出し、死んでくださったことを意味します。

3) 隔ての壁である敵意を打ち壊した

このことは耳にたこができるくらいいつも聞いています。でもきょう覚えていただきたいのは、十字架が隔ての壁である敵意を打ち壊した、というところでは、ここには二つのことが関係してきます。一つ目は敵意ということです。敵意というのは、だれか相手がある話しです。そもそも私たちがキリストから遠く離れてしまったのは罪がきっかけでした。神に背いた罪により私たちは神から怒りのさばきを受けるべき者となり、神の敵となりました。このようにして神と私たちの間には大きな隔ての壁ができてしまい、だれもこの壁の乗り越えることは絶対にできません。

この壁のことについて私が経験したことを少しお証したいと思います。私が東京の神学校に入って数ヶ月経った8月の終わりの頃でした。そのとき息子は中学一年生でしたが、突然からだのだるいと言って学校に行けなくなりました。近くの病院に行っても肝臓が悪いということはわかるけれど、原因がわからないので治療できないと言われ、途方に暮れてしまいました。時間だけがどんどん経って息まじ垂。成長期なのに食欲がないのでみるみる痩せ細っていき、このまま死んでしまうのではないかと恐れました。親としてなんとか子どもを助けたいと思い、いわゆる民間療法に頼るようになるのですが、そんな姿をわきで見えていたのが妻で、「信仰がないあなたはすぐに進学校を辞めなさい」と言いました。そのとき幻のように私の目の前に立ちのぼる壁がはっきり見えてきました。壁の向こう側は神の領域であって、息子のいのちはその壁の向こう側にあるのです。親であっても絶対に手を出すことができないとわかったとき、神の恐ろしさをまざまざと覚えました。この壁の前で私たちは望みを失っている。神がないということは、このことだったのです。

このこの隔ての壁を、キリストが十字架の死とよみがえりによって打ち破ってくださいました。だからあなたがたは希望があるのだと言われるのです。

3 和解と平和

1) 二つのものを

ここで考えたいのは、「二つのものを一つにし」とか、15節の「キリストは、この二つをご自分において新しい一人の人に造り上げて平和を実現し」、あるいは16節の「二つのものを一つのからだとして」というところです。二つのものを一つにした、というのならわかりやすい。ところが「一人の人」とか「一つのからだ」という表現をしている。これはどうしてでしょうか。

そもそも二つのものとはなんのことか、そこから確認します。三つ考えられます。まず神と罪人。イエス・キリストがともにおられて一つにしてくださいました。いのちのことで言うなら、キリストが死に打ち勝って永遠のいのちという希望を与えてくださいました。二つ目はこの箇所のテーマでもあるイスラエルと異邦人の関係です。一つになったのだから、そこにはなんの区別もないということも言っている。そして三つ目、私たちが日頃から悩んでいる人と人の争いのこと。神との隔ての壁が打ちこわされて、初めて人と人との壁もと払われ、和解が生まれていく。そこの本当の平和が築かれていくと言っている。

今世界は戦争と争いが絶えません。平和な世界が実現するようにとみな祈っている。では、どうやって平和が築かれるのでしょうか。すばらしいリーダーが現れて外交交渉をおこなってでしょうか。聖書から考えるならそうではない。なぜなら人と人とが和解するためには、まず神と和解する必要がありますからです。前向きな言い方をすれば、敵意を十字架によって滅ぼされたキリストに戻ることによってこの世界に本当の平和が実現できる。これが私たちの希望です。

2) 一つのからだ

最後に考えます。15節後半から16節前半で新しい一人の人、一つのからだという表現になっている。そんな疑問をわきに置いたままでした。たとえば、二人がけんかしていたけれど、キリストが仲介者となって間に入って来て、これからはお互い仲良くやりなさい、と言ってくれた。和解と言えばそんなことを想像すると思います。

しかし聖書は、お互い仲良くやりなさいではなく、新しい一人の人、一つのからだと言っている。からだはどう動いているか。心臓と肺はけんかしますか。しません。むしろ常にからだ自身がからだ全体の健康を維持しようとお互い協力し合っている。もし左の足が痛むというのなら、右の足がそれをカバーします。聖書的に言うなら、妙な言い方ですが「からだの器官同士が愛し合っている」ということです。

キリストが与える和解と平和とはこれによく似ている。ただ争いがないという世界ではない。一つのからだのようにお互いがお互いをいたわり愛し合う世界なのだというのです。ずっと争いばかりしている世界を見てきた私たちには、にわかには信じられない話しかもしれない。でも主はそんなすばらしい世界を約束してくださっている。神のひと

り子が肉を裂き血を流し、神との和解の道を備えてくださったことにより、死の先にある永遠のいのちという希望を与えてくださっています。
この神とともに私たちは歩んでまいります。